

Title	J・A・C・ブラウン著 産業の社会心理：工場における人間関係
Sub Title	
Author	中鉢, 正美
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.10 (1956. 10) ,p.748(60)- 751(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19561001-0060
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561001-0060">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561001-0060</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

### 書評及び紹介

J・A・C・ブラウン著

#### 『産業の社會心理』

—工場における人間關係—

これまでの人間關係あるいは勞使關係の研究は、それが社會科學であるという面においては現代社會の歴史的な把握が必ずしも充分でなく、また自然科学的な側面においてもその基礎概念が必ずしも明確に規定されていないという缺陷が指摘されてきた。著者はこの點、若干技術史的觀點にかたむきつつも、人間關係をその歴史的脈絡の中で理解し、かつ人間性一般の問題とみなされてきた多くのものを、歴史の特定の發展段階における特定の文化の産物として分析するとともに、その分析の手續きとして極めて手堅い精神病理學と社會心理學の方法を駆使することによつて、その基礎概念の確定についても多くの注目すべき提案をこころみている。

初期の産業心理學においてその基礎とされてきた前提觀念は、勞働者は各々孤立した單位であり、彼等の働く動機は最少の犠牲において最大の所得をうるにあり、その能率を規定するのは作業動作、疲労、物的作業條件等であるという、いわば人間機械觀によるもので

あつた。しかしこのような人間觀は、すべて一九世紀から二〇世紀の初頭にかけての、高度に産業化された國々での特定の社會的條件にのみ關連するものである。これは著者のいわゆる Paleotechnic の時期におけるイデオロギーであり、それに先立つ中世—Feudalistic—期においては、それに適合した家長制的人間關係のイデオロギーが存在する。そしてわれわれの課題は、いままさに展開されようとしている現代—Neotechnic—期における新たな人間關係を創造し、組織化してゆくことにあるというのが、この著者の主張であるといつて差支えない。

さて心理學の理論が哲學的、形而上學的段階から經驗科學の水準に一步をふみだしたのは前世紀の末葉であるが、その初期の研究は主として感覺心理學の領域に限定されざるをえなかつたために、人間個性の全般的な研究を必要とする精神病理學はこれと別個の發達をとげるとともに、更にその獨想的な展開としてフロイドの精神分析學をうみだした。しかし彼の理論が人間の本能を性欲と攻撃性にと求めたことは、やはり舊技術期の人間機械觀にわずらわされたものといわなければならぬ。人間にも「本能」があるとすれば、それは遺傳的に固定された刺激—反應様式としてではなく、生後の學習によつて個性が形成される場合の生物學的な動因あるいは欲求としてである。このような欲求を現實に充足する態度が個性的に形造られるための諸條件は、かかる態度が學習される社會の諸制度によつて左右されるが、この學習の基本的部分は直接個人と社會的諸條件との間で行われるのではなく、これら各人が對面的にその直接的經驗を交換しあう第一次集團を介して行われる。そして個人がそ

の個性の中核的部分を構成するのは満五歳位までの幼少期であるから、そこで最も重視されなければならぬものは家族集團である。ここで個性の中核を構成された個人は、やがて第二次的な社會集團の諸制度と結合することによつて個性の周邊部を構成されるのであるが、そこにおいても更に彼が構成する第一次集團、たとえば經營の制度内における作業集團は重要な媒介體となる。かくておおよそ人間行爲を統一している態度やイデオロギーの形成や變更は、彼の所屬する第一次集團の構造と深く結合しているものであることが知られなければならない。

このような認識は、やがて産業心理學の領域においても發生し、その直接の動機となつたものは、メイヨーのホーソン實驗による職場のインフォーマル集團とその組織の發見である。經營のフォーマルな制度は根本的には市場における競争の狀態によつて規定され、これはまた經營者の短見ともあいまつて職場集團のインフォーマルな組織の無視をもたらす。ところが自由競争の市場はそれによる經濟發展の餘地が狭まるにつれて獨占化の傾向をうみ、その大規模化した生産工程は周到な事前の計畫と、その達成のための勞働者の積極的な協力を必要とするに至る。ここに作業集團のインフォーマルな組織と、經營のフォーマルな組織との調整が、産業社會の重要な問題とならざるをえない理由が生ずるのである。著者はここで第一次集團の組織に關する詳細な分析を試みているが、それは要するに集團の人間の構造と、そのメンバーの意識との密接な關係の解明であるといつてよい。集團の構造は、それが本來自然的、自己目的的な統一體であり、メンバーの間には誘引、反撥、無視等の關係が

形成されるが、殊に重要なものは、その集團のおかれた特定の状況において、最もこれを誘導するにふさわしいと感ぜられるリーダーが選出され、これを中心とする地位や役割が形成されることである。

このような構造をもつた集團は、そのメンバーの平均的な能力の線で自己の活動を自主的に調節し、この調節を破るメンバーは集團から何等かの制裁をうける。このような構造はやがて彼等の意識に共通の性格を形成し、その客觀的な表現として職業語、儀禮、信條等の「文化」を造りだす。(これはやがて彼等自身のフォーマルな組織に發展し、經營組織と特定の問題について相對立するとともに、やがて更に廣汎な經濟的、政治的問題にも關係する社會的制度にまで到達するものでもあることを注意しておく必要があるかもしれない。) このような、いわば準客觀的事實の介在は、集團構造と意識の對應關係に重要な役割を果す。それはわれわれの直接的經驗を更に擴大するための間接的な手段であり、その基本をなすものは言語に基く思考である。ここに各人の行動に對する準據が生まれ、これはまた彼の意見、態度、更には主義としてあらわれることとなるのである。

## 二

このように第一次集團は、一應それ自身完結した生活體としての構造をもつているが、それは勿論更に廣汎な二次的社會集團の構成員としてのみ、始めてその存在を可能ならしめられるものである。個人の意識の中核的構造は、彼がその直接的經驗をそのまま受入れる幼児期をすぎた第一次集團である家庭生活において形成される

が、やがてその經驗を間接的手段によつて擴大しうる年齢に達するにつれて、二次的社會集團に組み入れられるとともに意識の周邊的構造もまた形成され始める。しかしその場合にも彼は孤立してそこに組み入れられるのではなく、ことにその最も基本となる産業社會との結合においては、新たな第一次集團としての作業集團に所屬することとなる。そこでこの作業集團と、それが所屬する産業經濟とが安定した相互關係にあるとき、始めて作業集團自身の安定を介してメンバーである彼の意識もまた安定感をうることとなる。これは結局、メンバーの意識の中核構造と、二次的社會の諸關係が作業集團に課する諸條件との適合いかんによるものと解される。この兩者に乖離が生ずる場合には、集團内で形成される意識の中核構造を土臺として、間接的な諸手段による經驗の擴大を通じてその調整の方法が求められなければならない。しかしこの經驗の擴大はその土臺となつた意識の構造によつて強く拘束され、従つてその社會的諸條件を正確には反映せぬ場合が生ずるとともに、その作業環境もまた、必ずしも彼等の作業能率を直接に左右するものとはならないのである。したがつて作業能率をたかめる産業内の社會的要因として、勞働者の意識の範圍をひろげ、かつこれを明確なものとするための努力がなされねばならない。これはまた、集團の積極的な意識と活動とを助長するような健康なリーダーの選出を必要とし、またかかるリーダーの働きを促進するような指導をも必要とする。リーダーとは要するに、その個性の中核的構造が、環境によつてメンバーの周邊的個性に造りだされた特性や態度を代表しているものということができる。

現代社會が必要とする人間關係は、健康なリーダーを選出し、かつ合理的な決定とそれに基く自主的な活動を行いうるような作業集團によつてのみ造りだされる。それはいわゆる産業民主主義の原理による勞働者の經營参加によつて促進されるであろう。しかし勞働者は既に自身のフォーマルな社會制度としての勞働組合をもち、これは更に廣汎な經濟的、政治的民主主義の貫徹のために働く役割をもつものであつて、これを前者に環元することはできない。産業心理學者の立場としては、その技術は決して萬能薬ではなく、また小集團や個人の行動から更に大きな社會的集合體にまで一般化するの危険であることを知らなければならぬ。

しかし、もしもこのように合理的な問題の解決が阻止されるならば、集團の構造には緊張が持續し、メンバーの意識には欲求不満が発生する。欲求不満とは、ひとがある目標にむかつて動機付けられながら、何等かの理由でその達成を妨げられている状態をいう。そこで最初に現れる態度は、これまでの慣習的な行動にかわつて創造的な新しい反應の現れることであろう。しかしそれが更に阻止されるならば、ここにさまざまな態度の攪亂とその方向の轉換とが現れることとなる。それは一般に、攻撃、退行、固執、諦念といった行動の特徴をもつといわれる。問題の解決を計る努力が阻止されるたびに緊張の集積がおこり、その不安定のはけ口が對象に對する直接的攻撃、あるいは目標の轉移、更には自己嫌惡となつて現れる。このような積極的な解決の自信が喪失されると、理性的な行爲から衝動的な行爲へ、あるいは批判力の消滅という退行現象が現れる。これは概して舊い行動様式への逆戻りという形をとるが、これが強度

に固執され、新しい効果的な行動が拒まれる場合もある。最後に長期にわたる欲求不満は、もはやあらゆる適應への努力を放棄した無感動、あきらめの状態をひきおこす。これらの各現象、とくに最初の攻撃的狀態はしばしば災害の原因となり、また緊張の集積した状態は疾病の源ともなる。また無關心や退屈等は疲勞感の發生に重要な關係が認められている。そしてこのような欲求不満の背景には、直接には第一次集團の緊張、經營の不適當な管理等があると考えられるが、その根本は社會全體の一般的緊張にあり、それはまた社會の文化的な崩壊に對する反應とみることもできる。傳統的な文化が崩壊し、舊い價値の體系は急速に崩壊しつつも、新しい社會の構造とその價値基準はいまだ確立されていない過渡的な社會において、ひとびとはしばしば欲求不満におちいる。そこで重要なことは、ひとびとの生活の絶對的な窮乏状態ではなくして、彼が當然到達できると感ずる生活に對する現實の相對的な不滿状態なのである。

三

本書の譯者は、第一章から第五章までを野田一夫氏、第六章から第一〇章までを伊吹山太郎氏が擔當しておられる。また各章の内部を細分した節とその見出し、および各章の末尾に一括された文献の提示は、いずれもペリカン叢書中の原著にはないものである。譯文は前半がすぐれており、若干の誤植と思われる箇所をのぞいてほとんど間然とするところはない。なお後半第一〇章にあげられているクレッジの文献「産業民主主義と國有化」と「ロンドン・トランスポートにおける勞働關係」とは別個の著作であることを附記してお

く。(中録 正義)

M. Саков

『社會主義の經濟的カテゴリーとしての原價』

M. Саков: О Себестоимости как Экономической

Категории Социализма.

“Вопросы Экономки”, No. 3, 1956.

一

ソ連において經濟計畫を行なう場合、價値法則を利用してということは、スターリンが提起した問題であつたが、その實際上の理論づけは必ずしも明かではなかつた。

たとえばボールは次のように述べている。「社會的總生産物の歴倒的部分——これは生産手段である——は國內の經濟循環の分野では商品の特長を失い、商品たることをやめて價値法則の作用の領域から外に出、商品の外被のみを保持する。社會主義では生産手段は本質的に價値をもたず、これをつくられた生産物に移轉すらし得ない」(「社會主義社會における國民所得について」經濟學の諸問題 一九五四年十號)。

このように生産手段に價値がないとしてしまうと、價値法則の利用はまことにあやふやなものになつてしまふ。更にカントールは價値は商品生産と有機的に結びついているから、價値は價値法則と同